第四十五回記念

台東薪能

令和七年七月三十日（水）午後六時開演
於・金龍山浅草寺境内（雨天時　浅草公会堂）

〈火入れ式〉　木遣り・纏振り　第五區木遣り会

番組

能

鶴亀

子方（鶴）　坂　瞳子
子方（亀）　坂　賀子
シテ（皇帝）　坂　真太郎
ワキ（大臣）　舘田　善博
ワキツレ（従臣）　梅村　昌功
間（官人）　山本　則秀
大鼓　柿原　孝則
小鼓　鵜澤洋太郎
笛　一噌　隆之
後見　永島　充
後見　奥川　恒治
地謡　金子仁智翔　小島　英明
奥川　恒成　鈴木　啓吾
中森健之介　遠藤　喜久
桑田　貴志　佐久間二郎

狂言

伯母ヶ酒

シテ（甥）　山本泰太郎
アド（伯母）　若松　隆
〈休　憩〉

能

土蜘蛛

ツレ（源頼光）　角当　直隆
トモ（頼光ノ従者）　金子仁智翔
ツレ（胡蝶）　桑田　貴志
前シテ（僧）
後シテ（土蜘蛛ノ精）　観世　喜正
ワキ（独武者）　宝生　常三
ワキツレ（従者）　則久　英志
ワキツレ（従者）　渡部　葵
間（独武者ノ下人）　山本　則重
後見　坂　真太郎
後見　遠藤　喜久
大鼓　柿原　弘和
小鼓　鵜澤洋太郎
太鼓　小寺真佐人
笛　一噌　隆之
地謡　石井　寛人　永島　充
中森健之介　奥川　恒治
小島　英明　中所　宜夫
佐久間二郎　鈴木　啓吾

附祝言

終演予定　午後八時四十分

【演目のあらすじ】

能楽評論家　児玉　信

能『鶴亀』

坂　真太郎

新春の唐の都が舞台です。四季の始めの節会には玄宗皇帝が不老門で日月の光を御覧になるので、文官・武官はじめ万民おしなべて拝賀のときを待っています。ほどなく大臣を従えた皇帝が蓬莱山とも見紛う金銀珠玉で荘厳された月宮殿にお出ましになり、嘉例に倣って池の鶴亀に舞を舞わせます。やがて舞い終えた鶴亀が皇帝に長寿を捧げると、喜んだ皇帝は玉座を立ち、自らが月の都で聞いて作ったという「霓裳羽衣の曲」を舞って国土の永遠を祈念して長生殿に還御します。めでたさに溢れた能です。

狂言『伯母ヶ酒』

山本泰太郎

酒屋を営む伯母がケチくさいことを言って酒を飲ませてくれたことがない、と不満たらたらの甥が、今日こそは上手く口実をつけて飲ませてみせる、と意気込んで伯母の店を訪れます。だが、伯母の断り方が一枚上手。甥は諦めて帰りかけますが、途中で計略を思いついて店へ舞い戻ると、付近に鬼が出たそうだから用心をしたほうがいい、と怖がらせます。実は自分が鬼に化けて酒にありつこうという算段。果たして計略は成功するかどうか。甥と伯母の駆け引きが笑いを誘います。

能『土蜘蛛』

観世　喜正

源頼光の武勇譚の一つです。何物の仕業か、頼光は病の床に伏しています。典薬寮の薬を携えて見舞いに訪れた侍女胡蝶に、もはや末期と弱音を吐く。その夜更け、意識の混濁する頼光の寝所に得体のしれない僧形が忍び寄り、思い知ったかと蜘蛛の糸を投げかけます。頼光が枕元の名刀膝丸を抜き放ち切り付けると、手応えとともに僧形は消え失せる。騒ぎを聞いた独武者が駆けつけると、頼光は化生は蜘蛛だと事の次第を語り、膝丸を蜘蛛切と名付けます。その蜘蛛切を賜った独武者は、化生を退治するべく家来を引き連れて蜘蛛の住処に向かいます。頼光と化生の立ち回り、蜘蛛の本性を現した化生と独武者たちとの争いが見どころです。